
High-tension!!

水島佳頼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

High-tension!!

【Nコード】

N5491B

【作者名】

水島佳頼

【あらすじ】

玲人は高校一年生。入学早々変な奴と友達になり、この先の生活にちよつとだけ希望が見出せてきたところ。けれど友達はかなりのトラブルメーカーで、玲人は色々な面倒に巻き込まれることに……？ 政府VS高校生四人組、勝つのはどっち？ 平成のニッポンを舞台にした、ロー・ファンタジー。

第一話 the Japan Govt .

二〇〇七年、四月。東京都千代田区、永田町。

総理大臣官邸の広い静かな執務室で、首相は頭を抱えていた。柔らかな絨毯の上をせわしなく歩き回りながら、首相は幾度もため息をつく。

苛立たしげに壁を蹴りつけ、首相は乱暴に椅子に腰掛けた。七三分けにした黒髪を手でぐしゃぐしゃにしながら、首相は何度も暴言を吐いた。やめてくれ。やめてくれ、本当に。

今年になって坂田首相は、前代首相から訳が解らないプロジェクトを引き継がされた。そのプロジェクトの内容は、十代前半の少年を追っかけるという馬鹿みたいなものだった。全く、やってもらえない。辞退したかったが、周りはそうさせてくれなかった。

前代首相曰く、これは核廃絶より遥かに大切なことで、絶対に少年を捕まえなければならぬらしい。ここは日本だ。罪も犯していない未成年を、一体どんな法律を使って捕らえるというのだろうか？ 考えただけでため息が漏れる。馬鹿らしい。全くもって、馬鹿らしい。

「総理、総理！ これを見てください、総理」

部屋に飛び込んできた秘書は、興奮した面持ちで駆け寄ってくる。いつも冷静な秘書が、こんなに慌てているのは珍しい。しかし、煩い。今はプロジェクトのことで頭が一杯だから、声などかけて欲しくない。

「何だ、手短かに言え」

適当にあしらったつもりが、怒ったようになってしまった。けれども秘書は気にした風もなく、ビデオカメラを差し出してくる。比較的新しいもので、保存媒体もテープではなくDVDになっているものだ。一時停止状態になったビデオの液晶には、さらさらした黒髪

をした冷たそうな少年が映し出されている。彼の後ろに黒板があるということは、舞台は学校なのだろう。

「プロジェクトMCの、資料です。総理、早く見てください」

「どうやら、件の少年がこの冷たそうな少年らしい。」

「せかすな、原田」

秘書を軽く叱ってから、一時停止解除のボタンを押す。画面に映っていた少年が右方向に消えて、代わりにスーツを着た男が見える。ここから、二人の口論が始まった。

スーツの男は教師らしい。少年は小学生らしく、冷たそうな顔に次第に不快感をあらわにするようになっていった。教師が少年に暴言を浴びせた時、少年が舌打ちして言った。

「……………！」

上手く聞き取れなかった。ここだけ音が飛んでいたのだ。続きの映像を見ると、教師は少年にひれ伏して謝った。一体何が起ったのか。

「授業参観での出来事なんだそうです。見ましたよね、総理。これがMCです。我が国が誇る、最強の兵器」

こんな映像を見て何を思えというのだろうか。首相は映像の中にいた少年と同じように、舌打ちしてやった。

「兵器？ ふざけたことを言うな、原田。こんな子供の、何が兵器だ。それに、日本は平和主義だろう」

たしなめたつもりなのに、秘書は至って真面目だった。首相の手からビデオカメラを回収しながら、彼は落ち着いた声で言う。

「平和主義を徹底するための兵器でもあるんですよ、彼は。総理はMCの語源をご存知ですか？」

「知らない。興味も無い」

即答できるほど、無意味な問いだった。もともとこんなプロジェクトなど何のためにあるのか解らないのだ。こんな少年に何が出来る？ 意味も解らずこの少年を追いかけるより、某国に拉致された被害者達を救済する方がよほど価値があると思う。

「『マインド・コントローラー』です。どついう意味か、解りますよね」

興味がないと言ったはずなのに、秘書は真面目に言った。別に聞きたくもなかったが、その単語に少しだけ興味をひかれる。

「つまり、教師は少年に操られたと？」

マインドコントローラーという言葉の意味からすればそうなるだろう。だが、そんな馬鹿らしい話はある得ないと思う。時代は平成であり、ここは日本だ。そしてこれは、映画などではなく現実なのだ。秘書はしらけた首相に横目を送ってきたながら、深刻そうな面持ちでビデオカメラに目を落とす。

「だから前代首相も、彼を追っていたんですよ。ここにこのDVDが送られてきたのは、半年前ですが」

「馬鹿馬鹿しい」

「前代首相も、そうおっしやってみました。最初は、ですが」

言いつつ、秘書はポケットに手を入れた。訝しく思いながらも、首相は秘書の動きを視線で追う。彼のスーツのポケットからは、小さなプラスチック製のケースが出てきた。中に入っているのは、ミニSDカード。携帯電話の端末に挿入するものと、同じものだ。

「首相、こちらもご覧になってください」

真摯な顔でケースを押し付けてくる秘書に気おされて、首相は頷くしかなかった。電源が入ったままになっていたノートパソコンを開いて、SDカードを挿入する。

後にこのプロジェクトが大事件を引き起こすだろうとは、そのときはまだ考えていなかった。

第二話 the Japanese high school student

二〇〇七年四月、静岡県静岡市葵区某所。現在ここでは、高等学校の入学式が執り行われている。

校長の長い話を聞きながら、万年青玲人おもとは早速この学校に不満を見出していた。

その一、体育館がない（建設中である）。その二、校舎が古い。その三、ざっと見ただけでも、友達になれそうな奴がないことがすぐに解る。

細かく言えば、上級生の態度とか校長の話とかそういうものも玲人の不満の一つだったが、大きく分けると不満の理由はこの三つになる。この三つはどうしようもないことで、だからこそ玲人は不満だった。

「新入生の皆さんも、そんな風に考えてくれればなあという風に思っています。それから……」

視線は校長に固定しているが、話の九割は頭に入っていない。この校長、喋り方がサラリーマンっぽいとか、『という風にして思います』と彼が言うのは果たして何回目だろうとか、玲人はそういうどうでも良いことばかり考えていた。

「……早く終わらないかな」
すぐ隣から聞こえた声に、横目で彼を見る。恐らく独り言だろうとは思うが、入学式の最中にこんなことを口走るなんて、見上げた根性である。

隣には、背格好が大体玲人と同じぐらいの、黒髪の男子が生真面目そうに座っていた。これがあの、不真面目な言葉を吐いた男子らしい。

彼は生真面目そうに校長を見てはいるのだが、時々こくりと俯いて欠伸をかみ殺している。あまり長い間彼を観察していると、怒ら

れるだろう。だから玲人は、視線を校長に固定したまま彼に話しかけた。なるべく唇を動かさないようにしながら、出せる最小の音量で喋る。

「どっから来た？」

暇だから。そんな理由だが、玲人が誰かに話しかけたのなんて久しぶりかもしれない。友達がいないというのは今に始まったことではなくて、玲人は中学校時代で友達と呼べる人には一人しか出会わなかった。彼は杉浦といったが、三年間ずっと他のクラスにいたから、話すことも一緒に遊ぶことも少なかった。そして、彼とは高校に入学する時に完全に縁が切れた。

「俺はこの近く。お前は」

「清水」

「じゃ、通学は電車？」

「そう」

校長はマイクで喋っているから、玲人たちの密やかな声は周りの教師たちにはばれてはいないようだった。玲人は校長の話を聞くふりをしながら、名前も知らない男子との会話を続けた。

彼の名前はかしさき はると榎崎晴斗というらしい。中学校時代について質問されたから、髪を染めたと答えてやったら彼はなぜか軽く笑った。

玲人の髪は今はライトブラウンだが、中二のころまで赤だった。初めて髪を染めたのは確か中一の終わりごろで、唯一の友達だった杉浦には「目つきキツイのに髪色のせいで余計に近寄りづらくなる」といわれた。そして、家族には口をきいてもらえなくなった。今でも家族との冷戦は続いていて、入学式だというのに親は来ていない。「良く受かったな、それで。俺、隣に座った時から疑問だった」

晴斗は言ったが、髪を染めているのは別に玲人だけではなかったように思う。入場の時に見たが、このクラスにもちらほらと金髪やら茶髪の生徒達がいた。それにしても、本当に何故受かったのだろう。高校側が受験番号の受理を間違えたのではないかとさえ思う。本当は前の番号の奴が受かっていて、玲人は落ちていたとか。

「そつだなあ、何で入学式の最中にくつちゃべる奴が二人も受かってんだろ？」

「ふっ……おい、あんま笑わずな。式の最中だろ」

思ったままを言うと、晴斗は笑い出しそうになって腹を抱えていた。彼はなかなか面白い奴だと思つた。

今まで出会つた人間で、晴斗みたいに玲人と話をしてくれる人は少なかった。いつでも不機嫌でいることが多い玲人だから、近寄りたく思われていることは自覚している。しかし玲人も、友達と騒げない学校生活をとても無味なものだと思つていた。そして、そんな学校生活を改善したいとも思つている。

「それじゃ玲人、そろそろ校長の話終わるから。後でまた」

まだまだ終わりそうに無い校長の話を聞きながしつつ、晴斗は言う。終わるなんて言われたが本当なのだろうかと思つていたら、本当に校長は話を終わらせて壇上から下がった。それにしても、この校長は喋りすぎだ。ゆうに一時間近く喋っていた気がする。

「新入生、起立！」

教頭らしい教師の甲高い声で、玲人は起立した。隣を見れば、晴斗と目が合った。彼のことは視界の隅で捉えていたので、髪が黒いという認識はあつた。しかしまともに正面から顔を見るのは初めてで、その顔が意外と美形であることに玲人は驚く。

切れ長の目に、通つた鼻筋。肌は白めで、にきびがあまりない。

こんな空間にいるくせに晴斗は妙に垢抜けていたから、芸能人みたいな奴だと玲人は思つた。立ち上がった晴斗は、やはり玲人と同じぐらいの身長だつた。晴斗はちょっと楽しそうに笑いながら、すぐ前を向いた。

多分、彼がブレザーをきつちりと着た姿を見るのは今日が見納めで、次に彼がまともに制服を着てくるのは卒業式になるだろう。いかにも真面目ですという顔をしておきながら、晴斗も人並みに悪乗りする。

号令に従つて礼をしたが、顔を上げた瞬間に玲人は再び晴斗の方

を向いた。

「後でスタバいかな？ これから暇だし」

「いいね。じゃ、入り口で待ち合わせ」

初めて誰かと外出しようという気になった。晴斗は結構気が合いそうだと何となく感じたし、入学早々仲良くなったのなんて晴斗が初めてだった。小学校も中学校も、幼稚園でさえも、始まりの日に誰かと喋ったことは一度としてなかったから。

今はまだ知る由もないが、万年青玲人の新しい友人は結構トラブルメーカーだったりした。

第三話 the happening happened .

玲人と晴斗は、午後になって本当にコーヒーショップに行くことになっていた。玲人は家に帰らず、新しい制服のまま晴斗と並んで歩いている。駅で待ち合わせて、そこから歩いてコーヒーショップに行くのだ。晴斗も一旦家に帰ったはずなのに、制服のままだった。

何で制服なのか尋ねてみると、晴斗は綺麗な顔に柔らかい微笑を浮かべた。

「だって玲人だけ制服だと変だし」

「二人して制服ってのも変だろ、今日は大体午前で学校終わるから」
「あ。そっか」

晴斗は外見がクールなくせに、意外にとんちんかんなところがあったりした。そして、さりげなく玲人のことを気遣ってくれる。

出会ってまだ数時間しかたっていないのに、晴斗は玲人と一番長く一緒にいた杉浦と同等のことをしたのだ。杉浦は思慮深くて優しい奴で、一緒にいて楽だった。晴斗も、何となく杉浦に似た感じを持っている。

「あ。玲人、携帯持ってる？」

「あるよ」

「アドレス教えて」

「おう」

玲人はポケットから携帯を出して晴斗に渡した。現時点でシェア率が一番高いメーカーの、まあまあ新しい機種だ。カラーはブラックで、つい先月に買い換えたばかりなのにもう傷がたくさんついている。

晴斗は玲人の携帯を片手で開き、自分のポケットから携帯を出す。晴斗の携帯は玲人と同じメーカーで、玲人のものより少し古い機種だった。

「玲人、メモリ番号003になつてるけど？」

何気ない声で訊ねてくる晴斗に、玲人も何気なく応じる。

「それがどうかしたか？」

「もつと友達多そうだと思った」

「んなわけねえだろ、俺友達いないから」

声色も口調も変えずに言ったのに、晴斗はちよつとの間黙った。

ちなみにアドレス帳に入れてあつた二件の連絡先は、自宅と祖父母宅だ。

杉浦は携帯を持っていなかったし、持っていたとしても電話もメールもしないだろうとふと思う。

「俺も友達いないよ。中学では避けられてたから」

「そういうこと人にカミングアウトしちゃって良いのかよ？」

「いいんだよ。玲人は俺のこと避けないから」

やけに自信満々に言われて驚いたが、確かに自分は晴斗を避けたりしないだろうなあとぼんやり思う。玲人は人に避けられることはあつても、人を避けることはあまりしない。

「あ。スタバそろそろ」

「やっぱりフラペチーノだな」

「俺は本日のコーヒーでいいや」

どうでもいい会話をしながら、玲人と晴斗はコーヒーショップに足を踏み入れる。わざと昼時は外したから、コーヒーショップはそんなに混雑していなかった。けれど、先客には玲人たちと同じ制服を着た男子が二名ほど居た。二人とも髪を染めていたが、何となく上級生ではないような気がする。

一人は金髪で、一人はダークブラウン。金髪の方は坊主に近いぐらいの短い髪をしていたが、茶髪は耳が隠れる長さだった。二人とも、携帯を出して何やら話し合っている。茶髪の方と目が合ったので、さりげなく逸らした。

玲人は手早くコーヒーを頼んで受け取り、座席を探す。空いている座席はあつたが、先ほど見かけた同校の男子と通路を挟んで隣の

位置だった。あまり気は進まないが、他に空いている席は一人分しかない。仕方なく玲人はそこに腰を降ろす。

晴斗は玲人の後ろを歩いてしたが、客の一人とぶつかってよろけた。そして。

よろけた拍子に持っていたコーヒをこぼした。おそらく半分がそれ以上。晴斗はコップをもった姿勢のまま固まって、自分の手元を見ている。晴斗にぶつかった若い男性は、驚いたような顔をしてさっさと逃げた。

運の悪いことに、こぼした分全てが制服にかかっていた。晴斗の制服ではなく、通路を挟んで隣に居た同校の男子の制服に。

第四話 go on the spree .

無言で固まっていた晴斗は、ようやく声をあげた。

「わ、あの、すみません」

ついにやったよこいつ。玲人は内心ため息をつきながら、ポケットからハンカチを出す。

「連れが迷惑かけました」

言いながらハンカチを差し出すと、予期せぬコーヒー・スコールの被害にあつた茶髪の少年は立ち上がった。染めている割に痛み何度合いが少ない髪は、彼が動かたびに店内の照明に照らされて煌いた。

「撥水加工、してあってよかつたあー」

少年は、別段怒っている風もなく言った。そして、玲人が差し出したハンカチを見て首を横に振る。

「大丈夫、こういう時こそおしぼりの出番だし」

テーブルの上に置いたおしぼりを持って、少年は微笑する。今まで黙っていた金髪は、思い出したように自分のおしぼりを茶髪の方に提供した。

「ほんと、ごめん」

「大丈夫だって！ ちょっとコーヒーの匂いするかもだけど」

うなだれる晴斗に、茶髪が大したことはないとも言いたげに手を振って見せている。

金髪は苦笑気味にこちらを見上げ、席を立った。そして、茶髪のコーヒーを拭くのを手伝いながら、至極簡単に

「名前は？」

勿論玲人は何も答えなかつたし、晴斗も困つたような顔でこちらを見ていた。金髪はなおも続けた。

「名前だよ。俺は私市隆也、こいつが物集新」

コーヒーを拭き終り、金髪の隆也はにこりと笑う。雰囲気的に野

球部っぽい彼は、立てば晴斗や玲人の身長を抜かした。おそらく185くらいなんじゃないかと思う。彼は眼鏡をかけていて、けれどその割りに頭は良さそうに見えなかった。

「二人ともあんまり聞いたことない苗字だね」

晴斗はすこし笑顔を取り戻し、隆也に話しかける。隆也は何か思いついたように笑い、晴斗の肩をばしばし叩いた。そして、激しく笑いながら言う。

「そー！ 苗字！ こいつさ、物集めるって書いて物集だから、あだ名ブツシュなんだよ！ 読み方変えてぶっしゅう、縮めてブツシュ！」

「言うな馬鹿っ、俺ブツシュってあだ名嫌なんだけど！ ああー、知られちゃったじゃんこのハゲえ！」

「ハゲいうな！ 俺の何処がハゲなんだよ言ってみろ！」

何やら騒ぎ始めた二人をみて、玲人は溜め息をついた。何だこのハイテンションで気楽な奴らは。見ていて面白いとは思うが。

「なあなあ知ってた？ この四人、皆同じクラスなんだぜ」

「よろしくー、俺はブツシュじゃないからな」

隆也と新は、満面の笑みで言う。玲人は晴斗と顔を見合わせ、それから名乗ることにした。

「万年青^{おもひ}玲人。よろしく」

「俺は檉崎晴斗。晴斗でいいから」

名乗ると、隆也が他の席から椅子を調達してきて、玲人と晴斗に席を勧めた。ありがたく座ることにして、玲人は持っていたコーヒ―をテーブルに置いた。玲人は隆也の隣に、晴斗は新のとなりに座る。

「おもと？ じゃあ、もって言う字は本のほう？ 元のほう？」

「違う、本も元も関係ない。まんねんあおって書いて万年青」

「すっげえ苗字。読めなくね？」

「物集も読めないだろ」

玲人は新と会話しながら、晴斗の方を見た。晴斗は玲人の正面で、

楽しそうに笑っている。

「何かおかしいか？」

「ううん。高校、楽しくなりそうだなって」

「……そうだな」

玲人は少し笑った。晴斗は楽しそうに笑いながら、こぼれて分量がすくなくなってしまったコーヒーを飲む。

公立高校の一年目は、なかなか楽しくなりそうだ。いきなり増えた友達にちょっと戸惑いつつ、玲人もコーヒーに口をつけた。

第四話 go on the spree . (後書き)

なかなかファンタジーっぽくならないですが、もう少しお待ち下さい。物集と私市の登場で、短い話に押さえるのが難しくなってきました。次回から、一話をもっと長くなるかもしれません。

第五話 get ready?

隆也と新は、それぞれ違うところからここにきているらしい。隆也ははるばる浜松から学校に通い、新は一緒に暮らしていた家族を置いて静岡市内の祖父母宅に泊まっているという。新が住んでいた家は山の方にあるので、かなり通学に不便なのだ。

皆、住んでいる場所が見事にばらばらだ。公立の普通科なんてどこにでもあるのに、どうして皆この学校を選んだのだろう。

「志願理由は？」

訊ねてみると、隆也はにやりと笑う。

「皆と同じとこ行くの嫌だったんだよね、俺。自己改革の一環だよ」

「あ。それ俺も」

晴斗が隆也と頷き合い、新が首を捻る。

「俺は前期落ちたから、後期の倍率少なかったここにしたんだよ。進学したいか就職したいか自分でよく解ってないし」

そうなのか。新以外は、皆同じ理由だ。

玲人は隆也と同じように、清水の学校に行くのが嫌でここにきたのだ。高校が始まったら新しい生活をしてみたいと、実はずっと前から密かに思っていたのかもしれない。

「あー、お前馬鹿だからか？」

「何だよ！ 今日会ったばっかだろ！？」

隆也と新がぎゃあぎゃあやり始めたのをみて、晴斗は笑う。目にかかる黒髪を払いのけながら、彼は楽しそうに言った。

「二人とも仲良かったから、学校同じなのかと思ってた」

「あれ？ お前らはそうなの？」

新が玲人に話を振った。丸っこくて人懐こそうな目が、こちらを見ている。

「違う、俺らも会ったばっか」

テーブルに置いたコーヒーを飲みながら言うと、隆也が笑う。そして、自分もカプチーノに口をつける。

「ま、そんなもんでしょ」

隆也はずれた眼鏡を少し直しながら、こめかみの辺りを搔く。

「何わかったような口きいてんだよー、タカあ」

「ああ？ おしんの癖に生意気な」

「何だよおしんって？ 新しい変なあだ名考えてんじゃねえよ！」

「あーはいはい、ブツシユ大統領には勝てませんねえー」

「うわこいつムカつく。ハゲ眼鏡！」

「だから俺ハゲてねえって！」

彼らの漫才のような会話を聞いて、たまりかねたのが晴斗が吹き出した。玲人も釣られて、ほんの少しだけ笑った。

「なんかさー、玲人ってあんま笑わないんだな。思いつきり笑えよ、ブツシユみたいに」

「そーだよ、玲人もっと笑え！ って、俺ブツシユじゃないって言うてるだろ」

隆也と新に言われ、玲人は首を捻る。笑えなんていわれたって。

最近、一番思いつきり笑ったのはいつだっただろう。心の底から笑うことなんて、玲人はとうに忘れていた。

「いきなり言われても笑えないって」

苦笑すると、隆也は満面の笑みを浮かべた。

「笑えよ玲人！」

隆也は玲人の隣から腕を伸ばし、これでもかといわんばかりに玲人の脇腹をくすぐり始める。玲人は必死に抵抗して前方の晴斗たちに助けを求めるが、二人は笑うばかりで相手にしてくれない。完璧に楽しまれている。

「ちよ、やめろ！ やめろって隆也っ」

かなり不本意だが、くすぐったくて笑う。

「タカでいいよ、おしんがそう呼んでるくらいだし」

「って、ちよ、おいマジやめ……」

がつん。

椅子の背もたれに後頭部をぶつけ、激痛に襲われる。隆也はあつと声をあげ、頭をかきつつこちらを見下ろした。

「お、おい？ 玲人、大丈夫？」

心持ち焦った様子隆也を見て、玲人は不敵に笑ってみせる。晴斗が不思議そうな顔をした。新が面白そうに笑いながら、こちらに身乗り出している。

「……こんのつ、ハゲ眼鏡え！」

「だああ！？」

シヨップの迷惑になるだろうとか、そういうことはあまり考えなかった。玲人はかなり楽しんで、隆也にくすぐり攻撃をしかえす。以前の自分だったら、まず間違いなく相手を殴り飛ばしていただろうが。

隆也が笑いすぎて目の端に涙をためながら、やめるやめると懇願している。ちよつと笑いながら、玲人は攻撃をやめてやった。隆也は息を荒げながら、それでも楽しそうに笑っている。

高一にもなつて、友達とくすぐりあうなんて。われながら子供みたいだと思った。けれど、友達と騒ぎあうことはどうということなのか、ちよつと学習した。

今年は結構、いいメンバーにめぐり合えたのかもしれない。

第六話 with my friends .

入学式翌日の、朝七時半。玲人は眠い目を擦りながら、静岡行き
の電車に乗っていた。片手には携帯。ブレザーは早速着崩していて、
ネクタイをゆるめてボタンを全開にしてある。車両には学生やスー
ツ姿の人がたくさんいて、なんだか窮屈だった。明日からは、もう
一本早い電車にのろう。

隣の乗客が肩にぶつかってくるのが煩わしかったが、玲人は揺れ
る車内で晴斗にメールを打った。返事はすぐに返ってきた。しかし
メールを開こうとすると、停車のアナウンスが流れた。静岡駅で降
りる人は多数いるから、玲人は流されるようにして車内から出る。
というより、押し出されたのだが。

歩きながらメールを読むことにして、玲人は早歩きで人ごみをぬ
ける。駅から出ると、排気ガスの臭いが混じった街の空気が妙に新
鮮に感じられた。晴斗からのメールには、早く来いよと書いてある。
自分を待っている誰かの存在なんて考えたこともなくて、玲人は新
鮮な感動に少しだけ自然な笑顔を浮かべた。バスを待ちながら、メ
ールの返事でも書こうか。

「れーいーじー！」

「うあ」

後ろからどんと突き飛ばされ、振り返ると隆也と新が居た。ふた
りとも、悪戯つばい顔で笑っている。

「…………おはよ」

「何か俺、今自転車壊れてるからバス乗ることになったんだけどな。
そしたら丁度、駅でハゲ眼鏡を見つけて」

「そうそう。俺はバス停でうるちよろしてるブッシュ大統領を見た」
皮肉を言い合っつてにやにやと笑い合う彼らに、玲人は苦笑を漏ら
す。いい加減、ハゲと大統領から離れたらどうなんだろうと思う。

…………まあ、でも楽しいからいいか。

「玲人まで一緒になるとは。ラッキーだな」

「けどさ、この調子で行くと学校着くの早するって。始まるの八時半だろ？」

隆也と新は会話しながらこちらを向いた。玲人は彼らの視線を受け止め、慣れない愛想笑いを浮かべて見せた。

「遅刻よりいいだろ？」

言ってみると、隆也は肩にかけたバッグの中から携帯を出しながら楽しげに笑う。

「ま、そうだな」

携帯を開き、来ていたメールを読む隆也。玲人はそれを見て、それから自分の携帯を見た。晴斗からメールを受け取ってから、もう数分たっている。返信しようと思ったとき、新に肩をつかまれた。

「バスきたよ玲人、乗ろ」

「あ」

タイミングの悪いことしか起こらない一日だ。けれど、こんな一日もいいかもしれない。玲人は、晴斗にメールを返すのを諦めた。どうせなら直接話そう。

そのままバスに揺られ、学校の前で降り、教室に入ると晴斗が一人で携帯をいじっていた。

「おはよ」

声をかけると、晴斗は笑顔で返事を返してくれる。出席番号順に並んでいる座席だから、玲人の席は晴斗と近い。

玲人は鞆を机に放置し、席を立てて晴斗のところに行った。隆也と新も晴斗の席に集まってきて、また例によって大統領だのハゲだのと言い始める。晴斗は呆れたように笑っていた。

「ちよつと早く来すぎた」

晴斗は笑いながら言っけて携帯を閉じ、ブレザーの内ポケットにしまった。

「でも、通学路混んでると朝からイライラするんだよな俺」

軽く冗談調に答えれば、晴斗は面白そうに笑う。

「同感。特に電車の場合、整髪料だらけのおっさんがいっぱい乗っていると嫌でしょ」

「あー、それすごい思う。あと、香水キツイOLな」

笑い合っているところに、数人の女子が入ってくる。隆也はにっこりと（というより、にやりと）笑って彼女らに挨拶する。

「知り合い？」

聞いてみると、隆也はいいやと首を横に振る。それを見た新は非難めいた目を隆也に向け、わざとらしいほど退いたリアクションをした。

「うっわー、早速女好き発動かよー！」

「煩いな大統領。これから一年仲良くやってくんだろ？ こーゆーのは第一印象が大切なのー」

隆也はその後も、教室に入ってくる生徒全員に挨拶していた。中には一瞬驚いたようなリアクションをする生徒もいたが、大概が楽しそうに隆也のテンションに合わせていた。

「隆也はすごいな」

晴斗が言った。

「俺には絶対真似できないと思う」

「しなくていいよお前は」

半ば本気で突っ込んだ。隆也が最初にあんなノリで話しかけてきたら、玲人は絶対に無視していたと思う。それを、この晴斗がやるなんて。

「何で？」

「ウザキヤラは隆也だけで十分。お前だけはまともでいてくれ」

「誰がウザキヤラだって？」

背後から低い声で言われ、振り返ると隆也にじっと見下ろされていて…… とりあえず玲人は走って逃げた。

隆也は物凄く楽しそうに、全力疾走で追ってくる。呆気にとられた新と和やかに頬杖をついて微笑している晴斗を見た直後、視界の

端に少し筋肉質な腕が映る。追いつかれる。

「れーえーじ君っ。誰がウザキヤラなのかなーあ」

「気持ち悪い呼び方すんな！　っていうかお前、もうこんな行動してる時点で」

「うわああああ！」

知らない誰かの声がして、突如身体が浮いた。視界が乱れ、やつと落ち着いた目には天井が映る。玲人は誰かに激突し、おかげで転倒したらしかった。

体中がずきずき痛む。呻いていると隆也の手が伸びてきて、玲人の腕を掴んで引っ張りあげた。

「おい隆也、てめえのせいで」

「玲人、落ち着け。落ち着いて生徒指導室に行こう。大丈夫、悪いのは俺たち両方で責任は平等で……」

「え？」

何が大丈夫なのか、責任が何なのか、隆也の視線の先を見る。玲人がぶつかったのは、確かに見覚えのある人だった。五十くらいの気弱そうな男で、廊下に転がって腰を押さえている。

「えーと……　隆也。これ誰」

相手に聞こえないように、隆也に耳打ちする。隆也は引きつった微笑を浮かべ、玲人に告げた。

「お前昨日あつたばっかだろ、校長だぞこれ」

……落ち着け、玲人。落ち着いて生徒指導室に行こう。

第七話 foolish tale .

「君達は、まだ一年生だ！ だらしない……」

校長のお説教が開始すると同時に、始業のチャイムが鳴る。玲人は俯いて適当にスミマセンを繰り返しながら、そつと隆也を盗み見る。隆也は物凄く真面目そうに、校長の顔をじっくり見ている。

「君達には社会人のルールと言うものが……」

「大体、その髪の色は何ですか！ 社会に出たら、そんなものは……」

……

「制服をきつちり着ないと心も緩んで……」

「規則を守らない人間は規則に守られない。君達のためを思って……」

……

断片的に校長の説教が聞こえるが、真面目に聞いているわけではない。これからのことについて考えていた。

担任には苦い顔をされるだろうし、クラスメイトには近寄りがたいイメージを持たれそうだ。何だかなあと思う。

「高校のスタートってというのは、一生の一番大事な」

「失礼します。校長先生、お電話です」

甲高い声で喋る女の教師が入ってきて、校長に声をかけた。校長は渋々席を立ち、大きく鼻を鳴らす。ねちねちとした説教は終り、ようやく解放される。

「以後、気をつけるようにして下さい」

「はい」

「すみませーん」

説教はお開きになったが、教室に戻りにくかった。多分今、学年集会とか身体測定とか、そういう類のことをしているのだとおもつと余計に教室に戻りたくない。

「てめえのせいだからな、隆也」

「怒んなよ玲人、いい思い出だろ？」

はあ、と大きくため息をつく。

「……まあ、いつか」

入学早々こんなことをして、何が「まあいつか」なのか解らないが、とにかくもうどうでもいい気分だった。心配しなくても、晴斗たちがいる。先生にどう思われようが、クラスメイトがどんな反応をしようが、関係ないのだ。

「遅れてすみませーん」

二人同時にそういつてクラスに入ると、一斉にクラスじゅうの視線が集まってきた。心持ち身をひくと、担任がチョークを片手に笑う。

「何をしてるんだね君達は。とつくにホームルームは始まつてるよ」
怒られるかと思つたのに怒られなかった。玲人は拍子抜けして、自分の席に向かった。

番号順に並べられた席なので、玲人の席は晴斗の前だ。隆也は比較的近い場所にいるが、新だけ苗字が物集でマ行だから席が遠かった。

担任は白のチョークで、黒板の中央に名前を書きはじめる。

「えー、初めまして。俺はお前らの担任の、板垣二三夫。三十八歳独身。担当教科は生物。フミオつて名前ダサいだろ。でも良く見ると、ちゃんと画数が二、三、四つて連続してて面白いんだぞ。それしかとりえがない名前だけだな」

あはははは、とクラスじゅうが笑う。特に隆也の声が大きかった。後ろで晴斗が笑っている声も聞こえて、オイオイと思う。

「とりあえず自己紹介始めるか。よし、一番から立つて名前と出身中学と身長と座高と体重と血液型と」

「せんせー、それじゃ個人情報もへったくれもないじゃないですか」
声を発したのは新だった。先生と新のやりとりに、再びクラスが笑いの渦につつまれる。

「今のは…… 三十六番か。名前なんだこれ、ぶっしゅうあらた？ すっげーな」

「違います先生、『もずめしん』です！」

玲人も笑ってしまった。これで新のスクールライフの幕開けは、クラス全員からのブッシュコールになっってしまうだろう。ちょっと可哀想な気もした。

「よし、一番から順に言っけ。設定項目は出身中学と入りたい部活と一言アピールで無難か？ アラタ」

「シンです先生。無難なんじゃないですか？」

「じゃあこれでいこう。相島から順に。何だあこのクラス、油井と吉田多いなあ。なあアラタ」

「シンです先生」

漫才のような担任と新の会話を聞きながら、自己紹介が始まる。

玲人の出席番号は五番だから、席は横七列の縦六通りで並んでいるクラスの、窓際の後ろから三番目になる。四番の遠藤が自己紹介を終えたから、玲人は立って机に手をつく。

「主席番号五番、万年青玲人。出身中学は清水のどっか。帰宅部希望、よろしく」

「いやー面白い苗字だね。おもとって読むのか！ まんねんあおなのにとっしてこんな前にいるんだ？ って思ってたんだけどさあ。万年青はクールキャラだな。もう一言付け足せ」

まさか言われると思っていなかったから、玲人は一瞬固まった。

「……授業中よく寝ます」

「俺の授業では寝るなよ。もう一言」

「授業よくサボります」

「俺の授業はサボるなよ。もう一言」

「提出物あんまり出しません」

「俺の授業の時は出せよ。ワンモア」

「先生しつこい」

「おお、やっと言われた」

クラス中が再び笑いの渦に巻き込まれる。この先生は、いちいち笑い話を作り出すのが得意らしい。遅れたことも咎められなかった

し、何だか笑いを生み出すことに加担しているっぽいし、ちょっと楽しくなってきた。後ろの晴斗が玲人の肩をつついて「ナイス」と囁く。

こうして万年青玲人の高校生活は、良いのか悪いのか微妙なスタートを切った。

第八話 our school life .

入学式翌日は、ほぼ自己紹介で終わった。晴斗の自己紹介でも担任の板垣が茶々を入れ、クラス中に笑いの波を起こしていた。

その日の放課後、玲人は家に帰る気がしなくて机に突っ伏していた。生徒たちは次々に下校していったが、玲人は鞆を無造作に床に置いたままで、机に伏せて欠伸をかみ殺す。

「玲人、どうかした？」

後ろから晴斗の声がした。彼もまだ教室に残っていたらしい。視界の隅にスカートの短い女子が何人が映っているのは確認していたが、まさかまだ晴斗もいるとは思っていなかった。

「帰る気しない。家族に会うの面倒い」

「昼飯マツクにしない？ 割引券あるけど」

「うー、何かそう言われたら腹減ってきたかも」

のっそりと起き上がると、晴斗は少し笑った。そして、さらさらした黒髪を手で整えながらスポーツバッグを肩にかける。玲人もバッグを掴んで、教室を出る晴斗の後を追った。

「どこのマツク行こうか」

晴斗に追いついたと同時に、そう訊かれる。

「昨日のスタバの近くで良くね？」

「どこ行っても混んでるんだらうな」

「仕方ないだろ、昼時だし」

階段を降りながら、他愛もない話をする。晴斗が最近聞き始めたという英国のバンドの話や、昨日見たドラマの話。それから、あたらしい担任やクラスについて。

「色んな意味で今年は当たりだな」

晴斗は言った。ちよっと嬉しそうだった。何故かは解らないが。

「俺もそう思うよ」

小中学校での孤独は、ここにはない。別に孤独は嫌いではなかつ

たし好んで独りでいたのだが、玲人は隣に誰かがいる感覚を少しずつ気に入り始めていた。

「玲人つてさ、超能力者どう思う?」

全くいつもの調子でそう聞かれた。

「ああ、手品師と区別つかない」

答えると、晴斗はうつんと首を捻る。

「じゃあ魔術師」

「ペテン」

「手品師は?」

「嘘が上手いと思う」

玲人が答えるたび、晴斗は考え込むような表情をする。

「どうかしたのか?」

「何でもない。じゃあさ、玲人はそういうの好き?」

「あんま興味ない」

「そっか」

それきり、この話は終わった。晴斗は話題を変え、将来乗るならどんな車がいいかと訊ねてくる。玲人も深くは考えずに、二人で一階のトイレに寄って髪にワックスを付け直してから昇降口を出た。

しばらく二人で街中を歩き回った。昼時の街は込み合っていて、とくに飲食店には人だかりができていた。新しく出来たデパートに至っては、まるで洪水のような人波に浸食されている。見ていてあまり気分の良い物ではなかった。玲人は人ごみが嫌いなのだ。

「……ん?」

「どうした、玲人?」

晴斗が訊ねてくるが、首を横に振って何でもないと言っておく。今、人ごみの中から明らかに敵意を持ってこちらを睨んでいる視線を感じたのだ。素早くあたりに目を走らせても、もう視線は感じなかった。何だったのだろうか、今のは。

「あー、あんなとこに店できたんだ。混んでるなあ。何の店だろ」

警戒する玲人の隣で、晴斗はどこまでも能天気だった。新しく出来た中古屋に興味津々の様子で、ちよつと覗こうとしている。

「とりあえず何か食おう」

この人ごみの中にずつといれば、またあの視線を感じそうで嫌だった。玲人は晴斗の肩をとんと叩いて自分に注意を向け、歩き出す途端に、視界の隅にまたあの視線を捉えた。今度こそ見間違いではない。柄の悪い金髪の男が、こちらをじつと睨んでいた。

「……晴斗。今日は気分変えてさ、清水行かないか」

「突然どうしたんだよ。帰る？」

「それでもいい。とにかく駅行こう」

なるべくなら、知らない人間と関わりたくない。ましてや、悪意をもってこちらを睨んでいる男なんかとは、間違っても接触したくない。晴斗は玲人の様子に少し不思議そうな顔をしていたが、小さく頷いてついてきてくれる。

背後に、誰かがついてくる気配を感じる。玲人は目立ったし、昔からよくそういう人に絡まれた。だから、喧嘩にも慣れていた。

もし相手が何かしてくるようだったら、晴斗だけどこかへ逃がしておいて自分は足止めとしてここで相手を殴っても良い。人ごみの中だったら、状況は自分に有利なはずだ。

「玲人、何考えてる？」

駅に向かうにつれて人は増えていく。肩越しに振り返ると、やはりあの金髪と目が合った。

「あ？ 何でもない、昼飯何がいいかなって」

「そう。でも何かあったら言ってよ」

そんなことを口走る晴斗の横顔が、どうしてか寂しげに見えて。

「じゃあ言うよ」

玲人は小さく呟いて、背後を軽く視線で示していた。なるべくなら晴斗は巻き込またくないという気持ちはどこかにあったのに、玲人は何故か晴斗に教えてしまっていた。

「平気だよ」

晴斗は言いながら、ハンバーガーショップを指差して笑う。

「マック行こ。テイクアウトにして公園かどっかで食べればいいよ」

「いいのかよ？ あれ絶対恐喝とか暴行目的だって」

「平気だよ、俺が何とかできるから」

そういう晴斗は見るからに喧嘩になれていそうにない。それに、後ろの金髪と殴りあうことになってその顔にあざが出来てしまうのかと思うと嫌だった。こういうことは、慣れている分自分がやった方が得策だと思う。

「何とかって」

晴斗は楽しげに笑った。何だか、それ以上何も言う気にならなくなった。晴斗には晴斗なりの考えがあるのだろう。

「混んでるね」

「まあ仕方ないな、昼時だし」

ハンバーガーショップに出来た行列の最後尾に並び、順番を待つ。真後ろにあの金髪がいることを、玲人は勿論解っていた。晴斗もそうだろう。

ファストフード店というだけあって、行列が前に進むのは早かった。晴斗は割引券を出し、玲人はメニューを指さした。少し待っただけで、本日の昼食はあっさり手に入った。

しかし、玲人が袋を受け取った刹那、背後の男が行動に出た。

彼は晴斗の腕を掴み、人ごみを掻き分けて疾走していったのだ。

第九話 Where is HALT?

咄嗟に玲人は晴斗を追った。晴斗を引つ張つて逃走したのはあの金髪で、服装も赤のTシャツでかなり目立ったから、すぐに見つけることができた。髪を全て後ろにまとめて赤のゴムで留めたその髪型は、見える限りの範囲で言えば誘拐犯しかいない。

「晴斗！」

こんな街中で叫ぶなんて、きつと今までの人生だったら考えられないことだった。晴斗は肩越しにこちらを振り返るが、金髪にどんどん引つ張られていく。周囲の人間は訝しげに玲人を眺め、ひそひそと何か呟きながら去っていく。玲人は人波を掻き分けるようにして、全速力で晴斗を追いかけた。

晴斗が何か言っている。けれど、人ごみやバイクの排気音のせいでうまく聞き取れない。

けれど、

「こなくていい」

唇の動きはそう言っていた。

「おい晴斗、意味わかんねえよ」

半ば独り言のように呟いて、玲人は人ごみを掻き分ける。少しずつ、少しずつ差が縮まりつつある。

「玲人」

「見捨てるって意味か？ さっきのはさ」

人ごみを掻き分け、そのまま突っ込む勢いで金髪の背中を思いっきり蹴りつける。金髪は前に倒れ、晴斗は引き倒されそうになったところでタイミングよく金髪の手を振り払った。

「こいつ、俺のこと知ってたんだ」

起き上がるうとする金髪を見下ろして、晴斗はぽつりと呟いた。

「先輩か何か？」

「違う、知らない人。……まだ玲人にも言っていないのに。玲人どこ

るか、まだ父さんしか知らないのに」

「何がだよ」

明らかに、晴斗は目の前に転がっている金髪を恐れているようだった。玲人は彼を踏みつけて起き上がれないようにしながら、晴斗をちらりと見る。晴斗は暫く迷っていたが、意を決したように玲人を見て言った。

「俺のありえない特技、こいつは知ってた」

何だ、そんなことか。そういいたくなるくらい単純な、晴斗が男を恐れる理由。

「どんな特技だよ。もしかしたらこいつ、偶然お前が特技を披露してるのを見たのかもしれないだよ」

「そんなわけない」

いきなり強い口調でさえぎられ、玲人はいささか驚いた。晴斗は金髪を見下ろして呼吸を少し荒くしていたが、ぎゅっと目を閉じて喉元に手をやった。何だか苦しそうである。

「……ふう」

落ち着いたのか、大きく息をついて髪をかきあげた晴斗に、玲人は尋ねてみた。

「大丈夫かよ、飯食える？」

「ついてきて。玲人にだったら、教えてあげる」

質問の答えは返してもらえなかった。有無を言わさない晴斗の剣幕に押され、玲人は首を捻りながらその場を後にした。金髪が追ってくるかと思つたが、追つてこなかった。彼は多分、人ごみに紛れた玲人と晴斗を見失つたのだろう。

「なあ晴斗、お前さっきから何か」

「誰にも言つな」

声をかけると、晴斗は玲人の質問をさえぎって口を開いた。彼らしくないその剣幕に、玲人は疑問を抱くがやはり彼は質問をする隙を与えてくれない。

「絶対、家族にも友達にも先生にも赤の他人にも言わないで。口外

したら俺も玲人も、命狙われるから」

「は？」

「だから、絶対言わないで」

意味が解らない。けれど、あまりに晴斗が真剣だから、玲人はこくりと一つ小さく頷いた。晴斗は安心したように微笑した。そして、小さく息を吸ってから呟いた。

「俺、超能力みたいなのが使えるんだよ」

「ぶっ」

思わず吹いてしまった。真剣におもむろに、何を言われるのかと思ってみたら。彼の一大決心は、なんだ、ただの冗談か。

「いや、真剣な演技上手いんだな」

「信じないなら信じなくてもいい」

どうやら彼の演技はまだ続いているようだった。もう暫く付き合っただけか、と思つて微笑気味に彼を見るが、その真剣な表情は先ほどよりも緊迫感を増していた。

いつのまにか玲人と晴斗はビル街の人気の無い路地裏にいて、薄暗い路地裏の真ん中で立ち止まっていた。青い空をさえぎるビルに背中を預けて、玲人は晴斗から目をそらさずに首を捻る。

「……まさか本当に使えるとかいふ？ そういう力」

「玲人で試してみることだってできるよ。玲人を玲人の意思と関係なく、俺は操ることができる」

「じゃ、やってみせるよ」

言つた瞬間に、思考回路で今まで考えていたことと全く別の思考が働いた。

晴斗に謝らなければ。

それは唐突なひらめきのように、けれど着実に思考回路に根付いてしまつていた。何故か振り切ることができないその思考に、何故謝らなければならぬのか解らないまま玲人は頭を下げる。

「ごめん」

「ほらね。俺は今、玲人に『謝つて』つて思つた。ただそれだけ。

俺の周りでは、ちょっと『こうして欲しい』と思うだけでも相手は思い通りに動いてしまう」

「だから入学式の校長の話も早く切り上がったとか？」

小さく、けれど確かに晴斗は頷いた。

「だから俺は、気味悪がられて友達もいなくて、玲人が俺の話に反応してくれた時に凄く嬉しくて、でもこれ言ったらきつと玲人も俺のこと…… もう解んないや、誰信じていいか」

不安感からか、言っていることがだんだん正確な文法を成さなくなっている晴斗。玲人は黙って、それから小さく首を横に振る。

「別に、それがどうした？ そんな重大な秘密話してくれる位にはお前が俺のこと信頼してくれてるって事実を、俺は嬉しいと思うけど」

たったそれだけの言葉で、晴斗は不安げな表情を崩して優しく微笑し、そのままその場に崩れ落ちた。

「おい？」

「ごめん、何か安心したら足の力抜けたっばい」

「ったく」

何だか笑ってしまう。玲人は晴斗に手を差し伸べて引つ張り起こしてやりながら、暗い路地裏を抜けて表通りへ出た。

「早く飯食おう。もうポテトしなびてるし」

言いながらファストフード店の紙袋を見る。ポテトの油が染みついて、袋は結構汚れていた。それに、人ごみを掻き分けて走ったせいでよれてくしゃくしゃになっていた。

「あーあ。あげたてじゃないと食べる気しないのに」

「いや、お前のせいだろ」

「あはは、ごめん」

とはいえ別に玲人にも責める気などないから、笑って許す。子供づれやカップルがちらほらいる広い公園についた玲人は、とりあえずしなびたポテトを放置してハンバーガーを齧ったのだった。

第十話 rest time

「それじゃあ、第一回クラスレクは四月三十日。えーと、来週の月曜だな」

その日、担任は朝のホームルームでいきなりそう発言した。呆気に取られた空気に包まれた教室で、担任だけは楽しそうに黒板の左端に予定を書き込んでいる。

「五限目のホームルームはレク、と」

「あ、あのー先生。ちよつと。何、レクって」

微妙な空気の中、新が担任に声をかける。

「ドッジにする？ サッカーにする？ それとも」

「却下！ ここはバスケで行こう先生」

教師に何故レクをやるのかと聞くのかと思いきや、自分の意見を言い出してしまった新にちよつと苦笑がもれる。晴斗を振り返ると、晴斗も仕方なさそうに笑っていた。

あの日以来、晴斗との仲がぎくしゃくするようなこともなかったし距離が遠くなったりもしなかった。晴斗は今までどおり玲人の隣にいるし、今までどおり呑気に笑っていた。

その笑顔の裏に苦悩を抱えていると考えると、晴斗の態度は普通でも玲人の方が少し気を遣ってしまうこともあるのだが。

「ちよ、ちよつとまでブツシュ。このままじゃお前と先生で話し合
いして決まっちゃうって！ 皆を入れるよ」

「おお！ シイチ、良い事言った」

「キサイチです。シイチって誰ですか」

隆也の参戦でクラスのどこかから笑い声が起こり、隆也は浮かしかけていた腰を椅子に落ち着けて新を見る。新はこちらを向く。

「んじゃ、万年青君。あとは頼む」

「なんで俺？」

クラスの視線が集中する。晴斗に背中を突っつかれる。こういう

の苦手なんだよとか思いながらただ一言、

「レク反対のひと挙手」

と言ったとたんに空気が固まった。

「おおい、まんねんあお！ ノリ悪いなあー、楽しく行こうぜ？

じゃあ今日の朝ホームルームはレク種目決定ってことで」

担任は一人で教壇の上を行ったりきたりしながら球技を羅列していく。

「俺もレクはやりたくないな」

後ろでフオローするように晴斗がそう呟いてくれたのが、ちょっとだけ嬉しかった。

昼休み、購買でパンを買って教室に戻る途中。新と隆也はかなり不満げだった。

「結局ドツチかよー。定番すぎてつまんねえ！ しかも女子は当てちゃダメとか」

「なら男女分けるって話だよなー」

いつもブッシュユだのハゲだのとかからかいあっている彼らも、やはり仲は良いのだ。

「あーだりいー。今日部活サボって帰ろうかな」

新は言いながら、既に紙パックのジュースにストローを突っ立てて飲んでいた。先生に見つかったら怒られるが、気にしないらしい。

「部活ー？ 野球部のほうがキツイし。毎日地道に筋トレだもんよ」

「お前、新しくきたコーチしらねえだろ。毎回外周十周なんだからな。部活の時間ほぼ外周だし。やっと外周終わったと思ったらもうほとんど試合やる時間ねえの。マジうぜえ。俺陸上部じゃなくてサッカー部だつての」

早速部活の話をしている二人だが、正式入部は先週の木曜にすんだばかりだ。ちなみに玲人は部活に行かず、放課後はいつもさつさと学校から出てその辺をふらついていた。部活なんてやりたくないが家にもいたくない。晴斗も部活には入っていないので、二人で一

緒にファーストフード店で暇を潰して帰ることが多かった。

「玲人と晴斗は部活やんねーの？」

「ダルイからやだ」

隆也の質問に即答する玲人だが、晴斗は少し首をかしげる。

「んー、入りたいとこない」

「えー。じゃあ何だったら入りたいんだよ」

「……なんだろ？」

「ないのかよ！」

新と晴斗の会話を聞いて、ちよっと笑いたなくなった。晴斗は本当に、一緒に居て楽しい奴だと思う。

「この学校、一応部活は全員参加のはずだろ？」

「だけど…… あれ、何だっけ名前。あいつ」

言おうとして忘れたのは担任の名前だ。特徴的過ぎて逆に度忘れすることが多々ある。

「担任？ フミオ？」

隆也の助け舟でようやく思い出した。

「あ。それぞれ。フミオ。あいつが気が向いたら入れって妙に笑顔で説得してきた」

「玲人明らかに集団が嫌いなタイプだしな。晴斗は？」

訊ねる新に、晴斗はいたって真面目に答える。

「家の都合っていうことにしてある」

「ぜってえバレルその嘘。三日以内に。だっていつもマックかスタバじゃんお前ら」

確かに言われて見ればそうだ。校内をうろついていることだってある。実際、何度か他の学年の先生から『部活はどうしたんだ』と声をかけられたこともあるのだし。この嘘が通じなくなったら、晴斗はどうやって逃げる気でのらう。

「大丈夫だって、フミオはメタボ対策のためにファーストフード控えてるから」

いや、そういふ問題なんだろうか。心の中で突っ込むと同時に、

新と隆也がぶつと吹き出した。

「マジかよそれ!？」

「おーいまさかのメタボ疑惑ー！ フミイちょっとそれはいただけ
ない！」

げらげら笑い、新はメタボメタボと連発して自分で吹いている。
その馬鹿らしい行動に、何だか和んでいる自分がいた。

「ちよつとまで、クラスレクつてまさか」

声を上げてみると、隆也がまだ笑いながら大きく頷いた。

「フミオのメタボ対策！ それしか考えらんねえ！」

「つてか晴斗、その情報どこで仕入れたんだよ」

玲人にとつて一番気になるのはそこである。

「え？ フミオのブログ」

一瞬、晴斗以外の全員が固まった。

「ブログつて、ブログだよな。あの、日記みたいなの？ そういつ？」

新が恐る恐る訊ねる。隆也がどうなんだという目で晴斗を見る。

晴斗は何の躊躇いもなく頷いた。

「つて、ええええ！！ あいつブログ持つてんの?! 教える！」

「俺も俺も！」

隆也と新は携帯を片手に晴斗に詰め寄り、赤外線でブックマーク
を送ってくれとせがむ。しかし晴斗は面倒に思ったのか、メールで
アドレスを一齐送信したようだ。玲人の携帯にも、同じタイピング
でメールが来たから。

「タイトル『ふーみんなの子育て日記』だから」

「ぶっ！」

しばらく二人の笑いはやみそうになかった。

第十一話 by the way . . .

毎日同じような授業を繰り返し、ついにレク当日になった。

この日も面倒臭い授業を一時間ずつ乗り越えていき、ようやく昼食にありつくところになると玲人は眠くてたまらなかった。五限目は寝て過ごそうと思う。しかし、レクでどうやって寝ようというのだろうか。

「ばか面倒い」

隆也が言った。現在、教室の前面の教壇に四人で並んで座り、購買のパンをかじっているところだ。席は近くの女子が『貸してほしい』と（物凄く頼みづらそうに）言ってきたので譲ってやり、玲人には現在座れる場所が他になかった。

「俺元外」

返答すると、新が何度か頷いた。ちなみに元外とは「元から外野」の短縮形で、中学でやった最初のレクで初めて知った用語だ。

「俺もそうする」

「じゃあ俺はすぐ当たって外野に行く」

一番普通にレクをやりそうな晴斗までその調子だ。どうやらこのメンバーで、担任と同じように燃えている奴は誰もいないようだった。それもそうだろうと思う。

「この学校可愛い先生いないし。応援されなきゃやる気でねえ」

「まあな。おばちゃんばつかだな。若作りしてるのみるとかわいそうになっってくる」

なかなかシビアな意見を出したのは新だ。ちょっと同感してしまった。

大体、玲人は可愛い先生なんて見たことが無い。教師なんて皆二十代後半なのだ。自分と十も歳が離れたような女性には、玲人は興味がなかった。

「女子もみんなケバいからねー。俺、そういうのタイプじゃないか

ら

「なにに、晴斗は清純派乙女がタイプってか？」

「どっちかって言えば」

晴斗はにっこり笑って新にそう返す。隆也は信じられないと言いたげに晴斗を見る。

「そんな女とお前がくつついたら爽やか過ぎるって！」

「確かに！ 現代男子の模範だろ」

「見習わないとな俺ら髪とか」

げらげら笑いながら隆也と新が会話し、何故か晴斗も一緒になって笑っていた。そこは晴斗にとっては笑いどころではないと思うのだが。

「俺だって先生とかからしてみれば校則違反の不良だよ？ 髪とか」

「どーこが！ まともじゃん普通に」

「これ五分刈りに見える？」

「ぶっ」

「あ。今俺の五分刈り想像したでしょ」

玲人は思わず吹いた。

確かに晴斗は玲人たちからすれば真面目だ。けれど、だからといって地味でもない。それでも晴斗が化粧の濃い不良系の女子とつるんでいるところはあまり想像できないのは、不良系の女子とつるんだら遊ばれそうだという印象が拭えないからだろうか。晴斗はどこか抜けているから、真面目でしっかりした女子と付き合わないとどんだん変な方向に染められていきそうな気がする。

「ブツシュは？ お前どっちも好みっぽい」

「俺？ 別に清楚とかそういうのはどうだっていいけど、胸ちっちゃい子じゃないとやだ」

「え、そこにこだわる？ 胸はデカくてなんぼだろ。っーか、ねえ奴は女としてランク低い」

新の発言に食いつく隆也。玲人は苦笑しながらパンを齧る。昼食はピーナツクリームサンドで、購買で百円で売られているものだ。

「その言い方酷くない？ 全国の貧乳女子に謝れよお前」

いや、その発言も既に女子に対して失礼なのではないだろうか。大体、女子からしてみればこんな会話をしていること自体が既に失礼だと感じる場合もあるだろう。

「だってさ、胸デカいと無駄に見せ付けてるっぽくて何かやだ。何っーかさ」

「くどい？」

助け舟を出してやると、新は頷いて笑う。

「そう。それ！ 何着ても胸強調してるよっでちよっど見ていてムカついてくる」

「お前なあ、それがいいんだろそれが」

「だからさあ、あんまりお前みたいな男と遊んでるような女は嫌なわけ。独占欲っーか。俺がいんのに他の奴に媚売るなって感じで結構、見てると胸ちっちゃい子っで一途な傾向にあるっぽいかなーと」

「へえー。浮気されたら地に墮ちるタイプか」

「まあな。めっちゃめっちゃへこむよ」

新の言葉を聞きながら、玲人は既に食べ終えたパンの袋を適当に丸めて教室の隅のゴミ箱に放つてみた。ちよっど外れたそのゴミを、出席番号順の席で隣に座っている狭山という女子が拾って捨ててくれた。

「あ。ありがとう」

狭山はちよっど笑って、すぐに席に戻っていった。彼女は独りで弁当を食べていたらしいが、もう着替えにいくようだ。

「玲人は？」

隆也の問いに、玲人は少し考える。好きな女のタイプ。外見的特徴と言ったら、あれしかない。

「……腕」

「は？」

「腕だよ。腕細い子がいい」

「ま、マニアック！ 出たフェチ」

あからさまに驚いたようなリアクションを取る新に、玲人はむつとする。

「お前らはないのかよそういうの。例えばほら、どっか遊びに行こうって腕絡められてさ、こいつ腕細いなーって、折れないのかなって思ったり」

「いや、ない」

隆也には即答された。

「俺ちよつとあるかも」

「だろ？」

ほら見る、というような目で隆也を見てやる。隆也はまだ玲人をマニア視しているようで、「ないわー」を連発している。

「皆はさ、いままでに何人と付き合ってた？」

晴斗がそう切り出したのをきっかけに、フェチの話は終わった。

「俺は二人。あ、一応三人」

答えてやると、新が意外そうにへえと呟く。

「玲人もつと多いかと思った」

「いや、俺近寄りがたいっぽいから。それに、一人の女と結構長く付き合いたい方だし」

「へえー、一途？」

「そういう隆也は？」

「俺は十人弱」

果たしてそれは全員が恋人だったのだろうかと玲人は疑問に思う。半分くらいは遊びなのではないだろうか。

「お前女遊び激しすぎ」

「だって女子から寄って来んだもん。来るもの拒まず、ってな」

「ねえよそれ。お前、玲人の腕フェチを『ないわー』なんて言える立場じゃねえ」

新と隆也はまた論争を始める。いかにたくさんを女を引つ掛けるかということについて隆也は熱く語り、新は一途のよさを語り返し

ていた。

「新は何人？」

「んーと、三人かな」

ころあいを見計らって訊ねてやれば、二人の熱戦は終わる。晴斗は軽く頷きながら、バッグの中からアーモンドチョコレートを出してきて齧っている。手を出すと一つくれた。

「少ないなあお前ら」

若干、見下した要素を含む態度。勿論わざとだろうから、腹は立たなかったが思わず苦笑がもれた。

「多すぎるのも問題。で、晴斗は？」

「一人だけ」

予想の範疇といえば範疇だったが、意外に思った。晴斗は容姿や性格からいけば付き合う女に不自由はしないはずだ。けれどもこんな結果が出るということは、やはりこの間知らされたあの「ヒミツ」が原因なのか。

「うお、究極に一途！」

大きく後ろに仰け反り、新はごつんと後ろの壁に頭をぶつける。

その拍子に、黒板のチョークの粉が降ってきた。玲人と隆也はすばやく回避し、もともと前かがみに座っていた晴斗は少し身を引いて避けた。

「新、頭ヤバイよ？」

恐る恐る晴斗がそう切り出せば、新はズルりと教壇からすべり落ちる。どうやら、新の発言に対して晴斗がそう切り出したと勘違いしたらしい。

「あ！？ お前何言います？」

「粉ついてる。てっぺん白髪」

「え」

新はブレザーのポケットから折りたたみミラー（明らかに女子向けデザインだから、おそらく彼女のものだろう）を出して上目づかに自分の頭を見る。

「うっわー」

「よし。そんな大統領はほっといてレクいくか」

隆也が立ち上がり、そんな隆也に続いて晴斗も早々に立ち上がった。

「めんどいなー」

「おい、これどうにかしてよこれ」

「洗ってくれば？」

「無茶言うなあ！」

ちよつと涙目の新を笑いつつ、玲人は適当に着替えて体育館に向かった。

第十一話 by the way・・・(後書き)

こんな内容だからちょっとUPを考えました。

そんなに話進んでない上に会話ばかり長くてぐだぐだです。

次回からは解決を見たいですね(汗)

第十二話 shapes of something BAD

相変わらずハイテンションな担任に、女子は大体慣れているようだった。フミオはそれなりに気のきいた冗談がいえる人だし、印象は悪くない。一部の不良系の女子は反感を持っているようだが、その他は抵抗なくフミオの冗談で笑っていた。

玲人は志願した『元外』になれず、仕方なく内野で逃げ回っていた。晴斗はじゃんけんで勝利して外に出て行ったが、玲人は生憎女子に敗れて内野に残ることになったのだ。

「大体なんで高校入ってまでドツチなわけ？」

不満そうに言ったのは出席番号順で分けられたチームで同じになった男子だったが、まだ名前は覚えていない。北河とか北上とかいう苗字だったが、北という字から先は忘れた。身長は玲人同様ひよる長く、髪は特にワックスなどでは弄っていないが若干長めで、黒縁の眼鏡をしている。

「お前はアンチフミオ？」

「うん。万年青は何気に好きだろフミオ」

「別に。どうでもいい」

正直、全てがどうでもよかった。ボールを避けながら、玲人は外野で暇そうにしている晴斗に恨めしさを込めた視線を送る。

「そういえば万年青は部活入ってるんだっけ」

「いや。今は無所属」

「へえ。俺の部活、人少ないから時間があるとき見に来いよ。樫崎もどうせ部活入ってないんだろ？先輩達優しいし」

「時間あったらな。で、何部？」

「茶道」

「悪い、俺そういうの無理」

飛んできたボールを胸で受け止め、即座に外野へ送る。フミオがなにやら楽しそうに歓声を上げた。いいぞやれやれまんねんあおー、

次は当てちまえー、などと叫ぶ声を適当に聞き流す。

「だろうな。樫崎は考えといてくれそうだけど」

「何、俺でも引き込まなきゃならないほど困ってるのかよ」

そう言ってみれば、相手は頷いた。

「そう。三年に先輩が五人いて、二年に二人いて、一年は今のところ俺だけ」

「寂し」

「馬鹿にすんなよなつ、和風好きで何が悪い」

喋っているとまたボールが飛んできた。先ほどから玲人と茶道部の眼鏡を狙っているのは隆也らしい。今度は茶道部の眼鏡がボールを取り、外野の晴斗に投げ渡した。

「悪いとは言っていないだろ……俺、入ってもどうせ幽霊部員だし。正座とかしたくないし」

「あーはいはい。分かった。気が変わったら来いよ、歓迎するから」
「ありがと」

興味は今のところほとんどなかったが、一応晴斗も一緒に誘われたのだし後で話してみようとは思う。

そう思ったところで、玲人はふと体育館の開放した扉から外を見た。人通りが激しい道路がすぐそこにあり、ビルが立ち並ぶ街がすぐそこに見える。

「ん？」

七三分けのスーツがいた。明らかにこのゲームを観戦している。

気持ちの悪い奴だと思った。さらに気持ちの悪いことに、男は携帯ではなく無線で誰かと話している。

「……また晴斗目当てかよ」

きつとそうに違いなかった。というか、あからさますぎて逆に偽物っぽくも感じる。

訝しげに視線を送ってやれば、七三分けは逃げるように視界から消えた。

「何かいった？」

「いや、何でもない。名前は？」

ノリで適当に訊ねていた。別に聞かなくても、名前なんてそのうち分かるから良かったのだが。ただ、晴斗の秘密について考えていたので、無意識に嘘をつくときの癖がでていた。玲人は嘘をついているときにはやけに口数が多くなる。

「俺？ 北谷光矩きたやみつる」

「ゴツい名前。昔の侍みたい」

「万年青玲人だっておっさんくさいと思うけど」
「まあな」

懲りずに狙ってくる隆也がいい加減鬱陶しくなってきた。玲人はボールを受け止め、捻りをつけて隆也の足元を狙う。綺麗に決まり、隆也は残念そうに外野に出てきた。

「新こっちこっちー」

それでもまだ玲人を狙うつもりなのか、ラインぎりぎりのところで新を呼ぶ隆也。飽きない奴だ。

新は隆也に意地悪そうな目を向け、隣にいた運動部系の女子にボールを渡した。

「だめ。レディファーストで長堀さん。はい」

「え」

「いつまでも俺らが独占しちゃ駄目だろ？」

「ちえ」

長堀はキレのある一発で、友人らしい女子をダブルで外野送りにした。転がり出たボールをまた別の女子が拾い、文化部系男子を派手に当てる。

「女子こえー」

笑いながら北谷は言う。

「部活、週に何日？」

「二週間に一度。先生の都合もあって。部活の日は和服着用」

「なにそれ」

「部室に置いてあるけど。あれだよ、イエモンはんのコマーシャル

みたいな。江戸時代のちよつといい町人が着てるような和服」

「ふうん」

自分には似合わないだろうなと思う。

「時々演劇部に間違われる」

「だろうな」

まさか茶道部なんて部活があるとは思わないに違いない。何となく演劇程度ならありそうな気がするが、茶道部は演劇よりも更にマイナーな気がするのはきつと玲人だけではない。

「外出ると剣道部の奴らと色合いが似てるから間違われる」

「茶道部って印象薄いんだな」

思わず呟くと、横目で睨まれる。

「うるせえ」

「悪い、別に馬鹿にしてるわけじゃないから」

そこで気を抜いていた玲人は、隆也の餌食になって外野送りになった。ようやく念願の外野だ。玲人は小走りで晴斗の元へ向かう。

茶道部の北谷は玲人がいなくなった後もかなり長い間頑張っていた。晴斗と二人で雑談しながら、玲人はコートをぼんやり眺める。

時々外を見て、あの怪しい男がいなか確かめたりも下が、もう誰もいなかった。

「玲人、どうかした？」

「さつきストーカーのおっさんがいた。なるべく一人にならないようにしろよ」

「俺なんか尾行して何が楽しいんだろう？ 隆也とか追っかけた方が面白そうじゃない？」

「あいつ意外にプライベート謎だし」

「お前……」

相変わらずのマイペースさに苦笑する。面白いか面白くないとか、そういう問題ではないということは本人が一番わかっているはずなのに。

終了の笛が鳴った。あとは掃除の時間に適当にどこかをふらつき、HRを伏せて過ごせば放課後だ。

「今日さ、うち来ない？」

唐突に晴斗が言った。

「あ？ 何だいきなり」

「いや、なんとなくだよ。昔から友達家に呼んだことなかったし」
「そういえば、玲人も友達の家遊びに行ったことは一度もなかった。小学校の頃ならあったかもしれないが、少なくともここ六年ぐらいは遊ぶような友達がいなかったから。」

「行くよ。どうせ家帰るの面倒いし」

家族との溝は深まるばかりだったから、玲人は家に居辛くて仕方なかった。特に食事の時などは、全員が食べ終わるまで自分の部屋にいて、少し遅い時間に一人だけ別メニューを食べたりすることがしょっちゅうだ。一人で家を抜け出してファーストフードを買いに行くこともある。

母親はもう目を合わせようとしなかった。父親は何かと怒鳴りたがった。兄は既に家を出ているから関係ないが、戻ってきてもきつと玲人とは何もコンタクトをとりたがらないだろうということはおもう手取るように解った。

「そういえばさ、晴斗」

「ん？」

「茶道部入る気ない？」

下らない話でもしながら、今日は晴斗の好意に甘えさせてもらおう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5491b/>

High-tension!!

2010年10月11日19時53分発行